

あとがき

第4回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会は、佐賀大学医学部内科学の藤本一眞教授のお世話により佐賀市で開かれた。一般演題14題は数として多くはないが、いずれも神経消化器病学を代表する人たちの発表が続き、優れた内容とともに活発な討論があり、熱気を感じさせる会となった。わが国におけるこの方面の進歩が著しいことを如実に示すものであり、本学会の理事長としては大変誇らしく、改めて学会会長の藤本教授および教室員、そして演者ならびに学会に参加された方々に厚くお礼を申し上げる次第である。

さらに、特別講演をさせていただいた九州大学遺伝子・細胞療法部赤司浩一教授は九大の“研究スーパースター”であり、多能性の幹細胞が多種多様な細胞群を生み出す機構を明らかにしてこられた研究者である。彼は、造血幹細胞系で系列特異的前駆細胞を純化・分離して、血球の分化、腫瘍化などの機構にかかわる遺伝子を同定しつつあり、さらに消化管上皮細胞への骨髄移植例からの分化誘導についても触れ、消化管の癌化や薬剤の抗癌作用などについて、実に示唆的な講演をされた。

また、特別講演をされたもう1人の九州工業大学高次脳機能講座粟生修司教授のお話は、食欲と種の存続の関係についてであったが、特に猿を使った実験で、食い気と色気には深い関係があるという、大変興味深い話となった。食い気の上昇とともにBMIが増え、同時に少子化、未婚率・離婚率の増加、EDや性同一障害をもたらしたといわれる。雄の性行動はエネルギー代謝と嗅覚情報(香水)が大いに関係し、雌は満腹で男性に興味を失うという。そして、過食が肥満や生活習慣病と密な関係にあるのは周知の通りであるが、摂食障害は性分化、生殖、低体温、免疫、睡眠障害、さらにリズム障害から情動の異常をもたらすといわれる。まさに世界のリーダーとしてご活躍中の先生方のホットトピックスの話が続き、いずれも聴衆を魅了した次第である。

今回から、優れた演題を多数の役員が点数化して学会賞を選び、また学会奨励賞も種々な領域の研究者に与えられた。本学会はinterdisciplinaryな会であって、各界の交流がさらなる発展を期待させる。わが国が確実にこの方面の牽引役になっていることを強く感じさせる会であった。

最後に、本誌が今回も本学会の講演記録集として発刊されたのは誠に喜ばしい限りである。大日本住友製薬株式会社のご厚意に厚く感謝する次第である。

編集主幹 佐藤 信紘